

論文審査の要旨(甲)

申請者領域・分野 氏名	総合医療・健康科学領域 集中治療医学分野 氏名 天内絵理香
指導教授氏名	廣田和美
論文審査担当者	主 査 花田裕之 副 査 村上 学 副 査 横山良仁
<p>(論文題目) Usefulness of presepsin for the early detection of infectious complications after elective colorectal surgery, compared with C-reactive protein and procalcitonin. (待機的下部消化管手術後の感染性合併症を早期に発見するためのプレセプシンの有用性、CRP およびプロカルシトニンとの比較)</p>	
<p>(論文審査の要旨)</p> <p>下部消化管手術の主要合併症である感染性合併症は、在院日数の延長や医療費の増大、術後死亡率の上昇と関係し、その早期診断および治療の重要性は高いため、本研究では下部消化管手術後に CRP (C 反応性たんぱく) ・PCT (プロカルシトニン) と共にプレセプシンを測定し、術後の推移及びプレセプシン値が術後感染症の早期診断に有用であるかを検討した。末期腎不全症例を除いた下部消化管手術 114 例で執刀前、術後第 1、2、3、4、6 病日に採血を行い、CRP、PCT、プレセプシンの 3 項目を測定。87 人が非感染群、27 人が感染合併群であった。測定の結果、CRP、PCT とも手術自体により上昇し、感染合併群で低下が緩やかなのに対して、プレセプシンは手術自体では上昇せず、感染合併群でのみ第 4 病日から非感染群に比較して有意に上昇した。ROC 解析では、感染性合併症発症に関するプレセプシンの第 6 病日におけるカットオフ値は従来の報告より小さい値の 294pg/ml で、AUC は CRP が 0.88、PCT が 0.79、プレセプシンが 0.74 であった。Cox 比例ハザードモデルを用いた多変量解析の結果から、CRP とプレセプシンの感染症診断カットオフ値は第 1 病日から第 6 病日まで全てが独立した説明因子であった。以上の結果から、術後早期から CRP と共にプレセプシンを測定することが感染性合併症の早期診断に有用である可能性が示された。</p> <p>本研究の成果は下部消化管手術患者の主要合併症である感染性合併症の早期診断から早期治療に結び付く新知見であるとともに、術後死亡率低下や医療費軽減に寄与する可能性があり、学位授与に値する。</p>	
公表雑誌等名	Scientific Reports. 2022 Mar 10;12(1):3960. doi: 10.1038/s41598-022-06613-w.

※論文題目が英文の場合は () 内に和訳を付記する。

※論文審査の要旨は本ページ 1 枚以内とする。

※論文審査の要旨の最後には、～～「学位授与に値する。」と記入する。